

上砂川町

土屋祐喜

1. 概要

1.1 沿革

1897 年に上砂川炭田が発見され、その後、1899 年に福井県鶉村から来た開拓者・山内甚之助氏他 8 名によって、この地に鍬が入れられたのが発祥。

1914 年には石炭社である三井鉱山株式会社が起業、以来炭鉱の町として発展し、1949 年には当時の砂川町、歌志内町の一部を分割して「上砂川町」が誕生した。

その後、出炭量も増加し、1952 年には最大人口の 32103 人を数えたが、エネルギー革命の急速な進行により 1987 年 7 月に閉山となり、73 年の炭鉱の歴史に幕を閉じた。

図 1 町章



出典：例規集データベース

図 2 カントリーサイン



出典：北の道ナビ

1.2 町名の由来

砂川町を母町とし、石狩川に合流するバンケウタシナイ川の上流に位置することから上砂川という名がついた。

ちなみに砂川とはアイヌ語で「オタ・ウシ・ナイ」(砂浜・についている・川)を意識したものである。歌志内(ウタシナイ)に似ていることから地域密着がかんがえられる

1.3 町章

構図は 3 箇の合同の平行四辺形を以て菱形を形造り、炭鉱町を象徴する黒ダイヤを表し、中央に篆字体による「上砂」の文字を記し、3 箇の平行四辺形は「川」を表す。色彩は 3 箇の平行四辺形は黒色又は紫若しくは濃紺色とする。菱形の周囲及び四辺形相互の間並びに文字の縁は白色とする。文字は金色又は赤色とする。

なお、上砂川町の町の花は芝桜とされており、町の木はハルニレとされている。

図 3 町花



出典：ウィキペディア

図 4 町木



町木 ハルニレ

出典：ウィキペディア

図 5 位置



出典：上砂川町 HP

図 6 位置



出典：ウィキペディア

1.4 地勢

上砂川町は、上砂川町は道央空知支庁管内のほぼ中央に位置し、歌志内市、砂川市、奈井江町、芦別市と隣接しており東部は重畳たる夕張山脈が南北に走り、次第に西方に傾斜しながら、石狩平野に連なっている。

辺毛山に源を発し、西流して石狩川にそそぐパンケウタシナイ川が町の北部を貫流して大きな沢をつくっており、本町はその沢沿いにある集落と、南東の山岳地帯で形成されている。

気候は南北の山が強風をさえぎり、温暖で降雪量も比較的少なく、住み良い恵まれた自然環境にあるという。

2. 歴史

2.1 上砂川の発祥と石炭

上砂川町は、1899 年に福井県鶉村（現・福井市）から移住してきた山内甚之助によって開拓されたのがはじまりであり、パンケウタシナイの沢の開拓を決意した甚之助は、20 数名の連名によって貸下げ申請を行って受理された。しかし、甚之助以外は名前を貸しただけで移住の意思はなく、開拓の準備は甚之助 1 人で行われた。何としても開拓を成功させようとした甚之助は、入植者の条件を厳しく設定する反面、入植希望者の大半が貧しいという実情に即した土地販売の方法をとり、2 年 4 ヶ月の間に 21 戸の自作農と 4 戸の小作農を集めた。やがて、パンケウタシナイの沢は、甚之助の故郷である「鶉」を冠して「鶉農場」と命名された。

山内甚之助がパンケウタシナイの沢に入植する前の 1866 年から 1889 年にかけて、上砂川地区に石炭が埋蔵されていることが、オタウシュナイ炭田（現在の歌志内市、上砂川町）一帯を調査した道庁技師の山内徳三郎や坂市太郎によって発見されている。その後、1896 年には、現在の東町地区の奥に上砂川地区最初の炭鉱となる「西山坑」が開坑した。この炭鉱は、北海道炭鑛鉄道（のちの北海道炭鑛汽船）によって開発され、将来的には上砂川地区の開発も行う予定だったが、断層やガスの発生が多いことから西山坑での事業は縮小され、1924 年には三井鉱山に買収されて三井砂川炭鉱の一部になっている。

2.2 三井砂川炭鉱と隆盛

三井鉱山合名会社 1909 年に三井合名会社に商号変更)が本格的に上砂川地区の調査を開

始したのは1898年からで、北海道庁の技師から三井鉱山に転じた西山正吾らによって上砂川地区の本格的な炭田調査が行われ、明治末期までに上砂川地区の鉱区の大部分を入手している。1911年に新山開発に備えて三井鉱山株式会社が設立され、1914年に三井砂川炭鉱が開坑した。しかしながら、しばらくは調査を兼ねた採掘が行われ、本格的な採掘が始められたのは3年後の1917年であった。このことからわかるように、三井鉱山にとって初めてのことである新山開発は慎重に行われたのである。1919年には、石炭を運搬するための鉄道(砂川 - 上砂川間)が敷設

された。この鉄道は、三井鉱山が鉄道用地を買収して鉄道院に寄付し、さらに敷設工事の経費のすべてを三井鉱山が負担するというものであった。鉄道の開通によって、石炭輸送が容易になったのと、第一次世界大戦の影響による工業のめざましい発達によって石炭の生産が増加し、それに伴って炭鉱の従業員も大幅に増加した。もともと石炭運搬のみに使用されていた鉄道が、地域住民の請願により旅客を取り扱うようになったのは1926年で、鉄道の開通と旅客の取り扱いはその後の上砂川市街の発展に大きく寄与した。上砂川の表玄関となった上砂川駅は着実に業績を伸ばし、1933年度の上砂川駅の運賃収入は全道4位となっている。上砂川は石炭によってめざましく発展し、その一方で農業は衰退の一途をたどった。

図7 互楽館



写真2 互楽館(1928年ころ撮影)註1

出典：上砂川町における石炭産業
の影響と炭鉱閉山後のまちづくり

2.3 三井炭鉱主導による町づくり

三井鉱山は従業員の福利厚生に配慮し、従業員の住宅をはじめ、市街地の形成や学校、スポーツ施設、文化施設などの建設も行い、上砂川の発展に大きな影響を与えた。例として、1917年に策定された区画割計画によって市街地の整備が計画され、道路の建設と土地の貸付が行われた。このとき建設された道路の位置は、現在でもほとんど変わっておらず、現在の上砂川市街の基礎・原形がこのときに形成されたといえる。三井鉱山は従業員の福利厚生に配慮し、従業員の住宅をはじめ、市街地の形成や学校、スポーツ施設、文化施設などの建設も行い、上砂川の発展に大きな影響を与えた。例として、1917年に策定された区画割計画によって市街地の整備が計画され、道路の建設と土地の貸付が行われた。このとき建設された道路の位置は、現在でもほとんど変わっておらず、現在の上砂川市街の基礎・原形がこのときに形成されたといえる。

また、本町地区には三井の負担によって小学校が建設されている。さらに、三井鉱山は会社ぐるみでスポーツ振興を積極的に推進し、上砂川でもスポーツがいち早く取り入れられ、陸上競技場や野球場、シャントエなどさまざまなスポーツ施設が建設された。すでに、

1918 年ころには野球、テニス、弓道などが行われていた。1936 年に開催されたベルリンオリンピックでは、田島直人選手（三井砂川陸上部所属）が三段跳びで金メダルを獲得している。

また、1928 年に建設された互楽館という娯楽施設は、1280 席を擁する劇場と、ビリヤード場や日本座敷、洋式会議室を備え、当時“日本一”とよばれるほどの施設だった。このように、戦前の上砂川地区は全道的にみても非常に恵まれた環境のもとで順調に発展した。

2.4 第二次世界大戦と戦後の復興

1937 年に勃発した日中戦争によって再び戦時体制となった日本では、国内のあらゆる産業が軍需に支えられて世界恐慌以来の不況脱出の道を歩んでいた。軍需産業のめざましい発展に伴い、石炭産業の需要も激増し、1940 年には全国で 5632t もの出炭を記録した。三井砂川炭鉱においてもおよそ 160 万 t の生産を記録した。しかしながら、熟練した鉱員の相次ぐ招集による未経験者の増加や坑内事情の悪化、さらに生活物資不足の悩みが表面化して、鉱員の作業意欲や能率に影響したことなどにより、出炭量はこの年をピークに伸び悩んだ。終戦後、日本の産業の復興、交通運輸や発電などの復旧にとって石炭は欠かすことの出来ないものとなり、三井砂川炭鉱でも戦時中にも増して増産運動が叫ばれた。三井砂川炭鉱は国の傾斜生産方式という政策のもとで復旧に努め、坑内外の整備と集約による効率化と機械による近代化により着実に生産量が増加した。

2.5 上砂川町としてのスタート

戦後復興の一方で、河川によって砂川町（現・砂川市）と歌志内町（現・歌志内市）に分断されていた上砂川地区の分離独立の運動が起こるようになった。なかでも、炭鉱と直接的な関わりのない市街地区や鶉地区は、本町地区などと違って三井からの支援を受けられず、砂川町からも配慮されることなく、非常に不便な状況のもとで生活していた上砂川住民の不満は増大し、着実に分離独立の声が上がっていった。分離独立について最初に動きを開始したのは、上砂川出身の砂川町と歌志内町の町議会議員だった。分町に関する建議書をそれぞれの町に提出、広く住民の協力を得て運動しようとの意図のもとに「上砂川町設立同士議員一同」の名で、1947 年 9 月に声明文を発表してアピールしたのである。翌月には「上砂川町設立期成会」が結成され、いよいよ本格的に分町運動が開始された。砂川町では分町反対の運動も起こったが、根強い分町運動の結果、1949 年 1 月 1 日に「上砂川町」が誕生した。町名には「上砂川」が用いられた。「上砂川」という地名は、三井鉱山が 1919 年に敷設した鉄道の駅を

図 8 炭鉱



出典：ふるさと上砂川

建設する際、パンケウタシナイ川の上流にあることから「上砂川」と名づけられたのがはじまり。分町後間もなく、東奈井江地区を奈井江町に編入し、1952年1月1日には現在の上砂川町の姿となった。分町時の人口は3万人を超え、1km²あたりの人口密度は全道一の高さであった。

図9 昔のアパート(社員寮)



昭和30年頃から建設され始めた近代的な本町アパート。

2.6 石炭産業の斜陽化

順調に増加していた出炭量は、1960年に100万tを超え、その後も安定して100万t台を維持していった。その一方で、効率化も確実に進行し、従業員の整理による減員が行われて人口は急激に減少し、1963年には人口2万5千人を下回った。さらに、急速に進んだエネルギー革命によって、能率の悪い中小炭鉱は次々と閉山し、残った大手炭鉱も一層の効率化を求められ、産炭地域の人口減少に拍車がかかった。上砂川町においても、三井砂川炭鉱の合理化によって急速に人口が減少した。この状況を危惧した上砂川町では、奥沢地区にスキー場と温泉施設をオープンさせたのをはじめに、閉校した中学校跡地を使って企業誘致を行なうなどして産業構造の転換を図ろうとしたものの、人口の減少に歯止めはかからず、1968年には人口2万人を下回り、1985年には1万人を切っている。

出典：ふるさと上砂川

図10 1960代の炭鉱



出典：かみすながわ

また、炭鉱の経営の効率化を進めるなかで福利厚生に関する施設の建設を抑制するようになり、炭鉱に代わって町が集会施設などを建設するようになった。

2.7 三井砂川炭鉱の終わり

1985年には、国内炭と輸入炭との価格差が円高によってさらに増大し、原料炭1tあたりの価格差が1万円を超えるようになった。すでに慢性的な赤字経営に陥っていた三井砂川炭鉱は生産の大幅縮小を余儀なくされた。

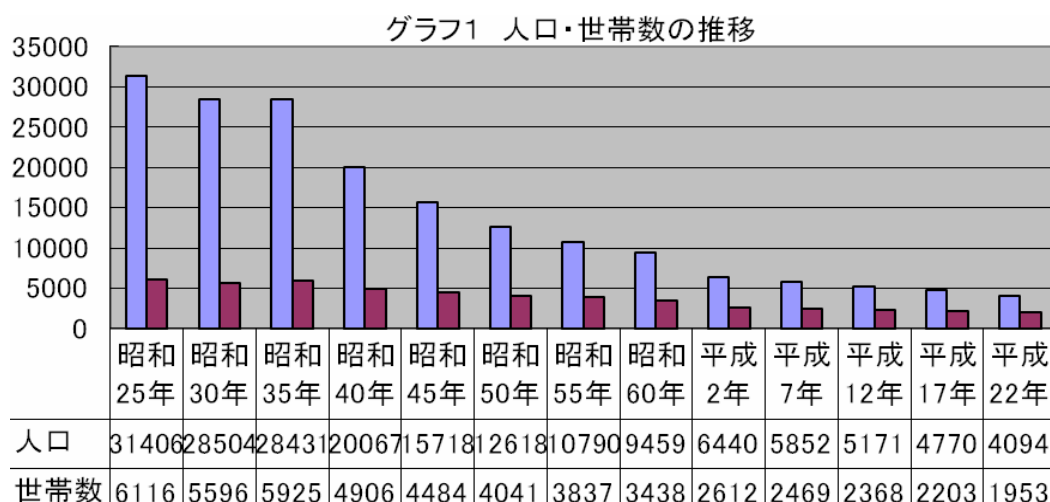
さらに、1986年11月28日には、国内炭の生産規模縮小を容認した石炭鉱業審議会の答申が出されると、かねてから閉山が噂されていた三井砂川炭鉱は緊張に包まれた。石炭産業を唯一の基幹産業とする上砂川町にとって、炭鉱の閉山は町の存続問題となることから、町を挙げての炭鉱存続運動を行った。

しかし 1987 年 3 月 31 日、三井石炭鉱業によって三井砂川炭鉱を閉山する方針であることが発表された。5 月に 6 月 18 日での閉山が正式に提案されると、長谷山英夫町長（当時）は町議会で閉山反対を表明し、上砂川町では閉山反対の運動が町を挙げて展開された。だが、閉山は避けられない情勢となり、労使交渉の結果、1987 年 7 月 14 日に三井砂川炭鉱は 73 年の歴史に幕を閉じることとなった。

閉山に際して、労働組合と町が一体となって、さまざまな要望、要請を行い、三井石炭鉱業と上砂川町の間で、閉山に伴う地域振興に関する確認が交わされた。

3. 人口・世帯数の推移

人口、世帯数ともに昭和 25 年に最大をとり、平成 22 年に最小をとっている。さらに、年々人口が過疎化の傾向にあり、ほぼきれいな左肩下りのグラフとなっている。この原因としてはやはり、炭鉱閉鎖による影響が密接に関係していると考えられ、また、それに次ぐ産業や街の発展が小さいことが挙げられる。

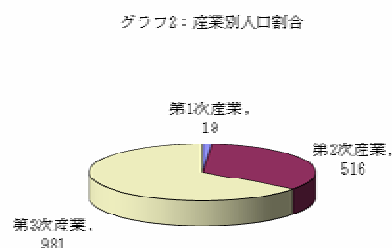


出典：国勢調査

4. 上砂川の暮らし

4.1 就業者における産業別人口割合

第一次産業の割合がとても低く、第三次産業であるサービス業が人口のほとんどを占める。その理由として温泉地や観光名所に携わっていることが考えられる。また、第二次産業が盛んだということからものづくりといった炭鉱の町の名残が伺える。



出典：農林水産相 HP

4.2 農業・漁業について

上砂川町では農業・漁業が盛んではない。北海道の産業の形態においては比較的珍しいタイプだと言える。漁業は海に面していないことが大きな要因だと言える。

農業はシイタケの生産が道内でもトップクラスで、上砂川町はこの「しいたけ（生）」の生産量が全道 2 位の町であり年間 830t(2009 年度)を生産。ちなみに 1 位は白老町。しかし農業の総数でみれば小さいといえる。要因は就業者が 19 人しかいないことが考えられる。しかし、このシイタケをモチーフとして「しいたん」と呼ばれる上砂川のイメージキャラクターがつけられた。

図 11 マスコット

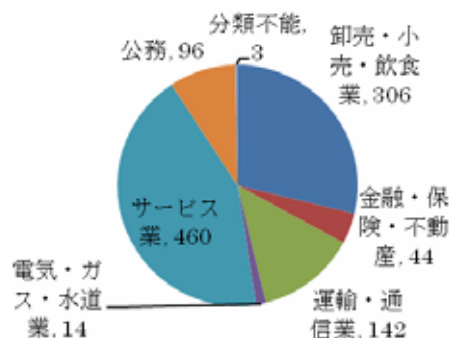


出典：上砂川町 HP

4.3 第三次産業

産業別人口割合からもわかるように第三次産業の割合が高く、この地域が観光誘致、サービス業に力を入れていることがわかる。特にサービス業の割合が高い理由の一つとして観光施設が多くそれを町 PR しているためそれに従い観光施設の従業員として仕事に従事していることが考えられる。例として温泉従業員やスキー場の係員などが挙げられる。

グラフ3 産業構造別一覧



出典：上砂川町 HP

5. 炭鉱跡地の利用

5.1 無重力実験センター

1991 年、旧三井砂川炭鉱の中央立坑を使用した地下無重力実験施設が開業した。この施設は、長さ 710m にのぼる旧中央立坑を使用して、カプセルを落下させることによって 10 秒間の微少重力状態を作り出すという施設である。旧中央立坑という上砂川のシンボルであった施設を使用したことと、地上施設では世界最長の時間にわたって微少重力環境を作り出す施設であったことから、上砂川町の新しいシンボルとして大きな期待がかけられるようになった。

図 12 無重力実験センター



出典：上砂川町 HP

新たな街づくりの柱として期待された地下無重力実験センターであったが、2001 年に産炭地域臨時措置法が失効し、さらには経済産業省が「実

験内容が産業の創出に結びつく応用型の研究成果が少なく、民間利用の利用も期待できない」として廃止を決定した。つまり、仕分けの対象になったのだ。閉鎖後、立坑櫓を中心とした実験施設は上砂川町に無償で譲渡され、長い間にわたって上砂川町のシンボルとして親しまれた旧中央立坑は今後も残されることになった。現在は町のシンボルとして観光地になっている。

5.2 圧縮空気貯蔵ガスタービン発電システム実証プラント

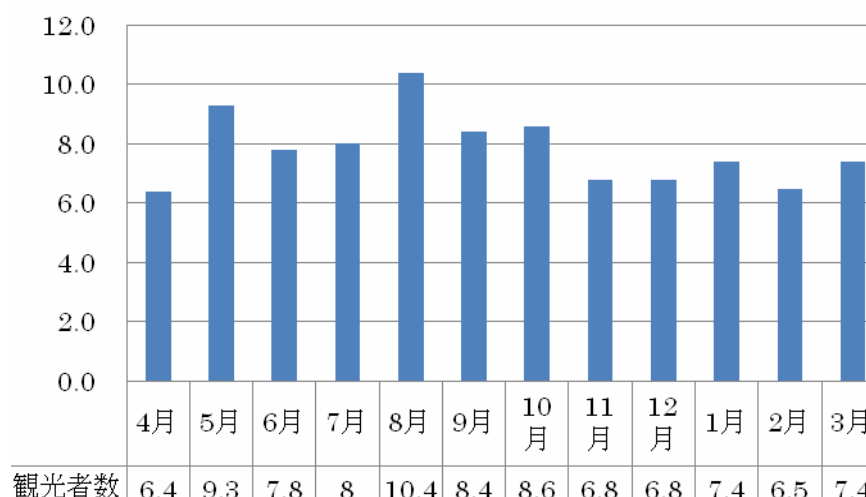
三井砂川炭鉱の施設跡を利用したもうひとつのプロジェクトが旧坑道を使用した「圧縮空気貯蔵ガスタービン発電システム実証プラント」という実験施設である。このシステムは夜間や休日の過剰電力を利用して圧縮空気を作り、地下の岩盤内に設置された貯蔵施設に貯蔵。電力を多く使用するピーク時に取り出し、燃料とともに燃焼させてガスタービン発電に利用しようとする一種の火力発電である。

通商産業省（現・経済産業省）は、旧三井砂川炭鉱の坑道を使用して 2000kW の出力規模を持つ施設を建設した。しかしながら、2000kW 程度の発電規模では採算が合わないとして、仕分けの対象となり 2001 年に実験を終えて閉鎖された。

6. 観光

6.1 観光入込総数

グラフ4 観光入込総数(2010年度)



出典：北海道庁統計局

このグラフから上砂川町への観光客の入込の少なさが分かる。八月に最大をとり、四月に最少となっている。一年を通してみるとやや冬の時期のほうが観光客は少ないといえる。

観光誘致が非常に少ないため、それに伴い定住してみたいという人の数も減ることが予想される。こうしたなか上砂川町ではこのような状況を打破すべくさまざまなまちおこしが行われている。

6.2 観光スポット

炭鉱閉炭後、上砂川では炭鉱に代わる様々な企業を誘致しようとする。そこで観光も一つのストロングポイントとなった。ここでは観光スポットをまとめてみた。

6.2-1 バンケの湯

豊かな自然と大地からわき出る温泉がもたらす安らぎを、満喫できる場所となっている。値段も日帰りなどがあり充実しているためリーズナブルとなっている。

6.2-2 旧砂川駅

上砂川の輸送拠点の中心を担い、上砂川発展の礎となった上砂川駅。現在は倉本聡のドラマ「昨日、悲別で」の悲別駅となったことにちなんだ資料館になっている。また、倉本聡の他のドラマ「北の国から」では上砂川市という架空の町が存在するがこれは上砂川町がモデルとなっている。

6.2-3 上砂川岳日本庭園

四季折々の自然と和風庭園の佇まいで、心を癒せる場所。四季折々の変化に富む自然に囲まれた2万㎡の大庭園には庭石・三段落ちの滝・八つ橋・四阿（あずまや）があり「和の心」を味わうことができる場所になっている。

また、日本庭園の入口には、ウグイスをはじめとする18種類の野鳥のさえずりが聞こえる、全長40mの「野鳥の橋」がある。

図 13 観光名所(上段左からバンケの湯、上砂川岳日本庭園、
旧上砂川駅)



出典：上砂川町 HP

しかし、このように観光や定住誘致に力を入れているがあまり効果はなく人口減少は進んでおり歌志内市に次ぐ勢いの財政難におちいつている。今後どのような形で解消していくかがこれからの上砂川の課題といえる。

* 参照 HP

上砂川町 HP : <http://www.town.kamisunagawa.hokkaido.jp/>

上砂川町 - ウィキペディア :

<http://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%B8%8A%E7%A0%82%E5%B7%9D%E7%94%BA/>

ふるさと上砂川 : <http://donetjp.com/kamisuna/>

上砂川町における石炭産業の影響と炭鉱閉山後のまちづくり :

<http://society.s54.xrea.com/kamisunagawa.files/essay02.html/>

北海道庁 HP : <http://www.pref.hokkaido.lg.jp/>

農林水産省 HP : <http://www.maff.go.jp/>

株式会社マガジンハウス HP : <http://webdacapo.magazineworld.jp/gulliver/49719/>